

下出大介

I. 研究目的 モリアオガエル (*Rhacophorus arboreus*) は池沼の上に迫り出した樹上に、クリーム色をした泡状の卵塊を産み付ける独特の産卵習性を持つことで有名である。そのため、天然記念物に指定される繁殖地も多く、日本産のカエル類の中でも古くから生態学的研究の対象となってきた。近年、世界的に両生類の絶滅や個体群の減少が報告されるようになった (Stuart *et al.*, 2004) が、その原因の一つに考えられるのが生息環境の変化である。本種も、生息地における森林伐採や道路建設などの開発行為により個体数が減少しており、多くの都府県 RDB に登録されている。本研究では、個体の移動範囲の把握、繁殖期における産卵環境、産卵回帰性、樹種選好性を明らかにすることで、本種の利用可能な環境を検討した。

II. 調査地 本研究は富山県中新川郡立山町横江に位置する民家敷地内の池 (2×2 m) と岐阜県揖斐郡揖斐川町谷汲に位置する谷汲山華厳寺内の緑ヶ池 (100×90 m) の2地点で行った。この2地点では、毎年繁殖期には本種の卵塊が確認される。

III. 調査方法 1) 個体の移動範囲を明らかにするため、谷汲山華厳寺の緑ヶ池調査地において、山林への移動分散調査を行った。調査期間は平成 19 年 5 月下旬から 11 月上旬である。調査地の山林を散策し、捕獲した個体については、体長、池からの斜距離、周辺環境を記録した。2) 本種の産卵行動を促す環境条件を明らかにするため、立山町の調査池周辺において、気圧、気温、湿度を測定し、産卵との関係について解析した。3) 本種の産卵回帰性を明らかにするため、立山町の調査池より南東 12 m に人工池 (1.2×0.9 m) を設置した。調査池と人工池の水質を比較し、目視により卵塊の有無を確認した。4) 本種の樹種選好性を明らかにするため、谷汲山華厳寺の緑ヶ池調査地において、卵塊及び成体の確認数と樹種との関係を調査した。

IV. 結果及び考察 1) 幼体は、体長 25 mm に達するまでは池周辺の草本上に留まり、体長 25 mm を超えると森林内へ移動する傾向が見られた。個体が確認された場所の池からの斜距離は最大で 95 m に達し、ある程度の広さを持つ連続した森林帯が必要であることがわかった。2) 産卵があった 5 月 25 日は気圧が著しい低下傾向にあり、湿度は終日 99% を示した。本種の産卵条件としては湿度を十分に保つ森林環境が必要であると考えられる。3) 人工池において、6 月 9 日に一つ、更に 29 日には二つの卵塊が確認されたことから、本種は生息範囲内に新しく創生された止水にも産卵すると言える。しかし、孵化した幼生は 9 月下旬になっても変態せず、人工池には正常な世代交代に対する障害があると思われるが、今回の水質結果からは特異な点は認められなかった。4) 樹種選好性は見られなかったが、卵塊の全てが止水の上に迫り出す樹木で確認され、産卵には樹木の生育場所が重要であると思われる。

今回の調査では、得られたデータ数が十分とは言えないため、今後も継続した調査を行う必要がある。また、新たにテレメトリー調査を行うなどして、本種のより詳細な生息範囲及び環境を把握していくことが必要だと考える。